

S C H E D U L E						
	歴史展示室	常設展示室 1	常設展示室 2	常設展示室 3	常設展示室 4・5	特別展示室
11月	かがわ今昔 の香川の歴史と 文化	芝居がスキ! 12/20	11/5 カラフル	弘法大師空海の 生涯と事績		11/15 第89回 香川県美術展覧会 12/20
12月						
休館 12/21～1/1						
1月		1/2 冷静と情熱の工芸 1/18	1/18		第72回 日本伝統工芸展 1/2～1/18	
2月	設備改修のため臨時休館 1/19～2/20					
3月		2/21 書の世界 一宸翰を 中心に	2/21 モノクローム		2/21 現代書・ 美の競演	

学芸講座 無料・要事前申込

会場：地下1階 研修室
定員：各回72名(要事前申込・先着順)

①「芝居がスキ!～香川県内の歌舞伎～」
現存最古の芝居小屋、旧金毘羅大芝居「金丸座」(重要文化財)が残る香川県。常設展「芝居がスキ!」の展示資料などから、地域と芝居(歌舞伎)の関わりや、芝居好きの人物などを紹介します。
日時：11月22日(土) 13:30～15:00
講師：黛友明(当館専門学芸員)
申込期間：10月22日(水)～

②「宸翰の世界」
宸翰とは天皇が自ら記した書のことです。宸翰にまつわる歴史や、高松松平家に伝来した宸翰の見どころをお話しします。
日時：3月21日(土) 13:30～15:00
講師：藤井俊輔(当館学芸員)
申込期間：2月21日(土)～

■学芸講座の申込方法
電話、「香川県電子申請・届出システム」(※)を利用したインターネットから。
※「香川県電子申請・届出システム」を利用する場合
香川県立ミュージアムウェブサイトの「関連リンク」から「香川県電子申請・届出システムのページへ」をクリックしてください。

食文化体験講座 有料・要事前申込

「できたてのお餅で、あん餅雑煮を作る」
食の体験を通して、香川の歴史・文化に親しむ講座を開催します。全国的にも珍しい、郷土さぬきのお雑煮を作ってみませんか。調理・試食とともに、雑煮にまつわるお話も紹介します。
日時：12月6日(土) 10:00～12:00
対象：一般(小学生以上。小学生参加の場合、保護者の参加も必要)
場所：地下1階 実習室
参加料：1,200円(1名につき)
定員：18名
申込期間：10月21日(火)～11月11日(火)当日必着
申込方法：香川県電子申請・届出システムまたは往復はがき
※1通につき、2名まで申込可。応募者多数の場合は抽選。



香川県立ミュージアム

〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002(代表) FAX.087-822-0043
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/index.html
日時・内容については変更になる場合があります。最新情報は当館ウェブサイトをご覧ください。



瀬戸内海歴史民俗資料館

〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setonakaikan/index.html
日時・内容については変更になる場合があります。最新情報は当館ウェブサイトをご覧ください。



香川県文化会館

〒760-0017 高松市番町1丁目10番39号
TEL.087-831-1806 FAX.087-831-1807
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/kmuseum/bunkakaikan/kfvn.html
日時・内容については変更になる場合があります。最新情報は当館ウェブサイトをご覧ください。



第89回 香川県美術展覧会

会期：1期(絵画・立体)11月15日(土)～11月24日(月・休)
会期中無休 2期(工芸・写真)11月28日(金)～12月7日(日)
3期(書) 12月11日(木)～12月20日(土)
開館時間：9:00～17:00
会場：特別展示室、常設展示室4・5ほか
観覧料：全期を通して、一般750円、前売・団体(20名以上)600円
(高校生以下、県内在住の65歳以上、障害者手帳・特定医療費(指定難病)受給者証・小児慢性特定疾病医療費受給者証等の提示者とその介護者は無料)

ギャラリートーク 要観覧券・申込不要

県展審査員が作品を解説します。
日時：1期 絵画 11月15日(土)、立体 11月16日(日)
2期 工芸 11月29日(土)、写真 11月30日(日)
3期 書 12月13日(土) いずれも14:00～

瀬戸内海歴史民俗資料館のイベント 無料・要事前申込

1. 重要文化財指定記念事業 企画展「新民芸の創出」関連イベント
①連続講座 第3回 「デザイナー和田邦坊の秘密」
香川県が生んだマルチクリエイター和田邦坊。昭和30～50年代、地元の物産品パッケージを数多く手掛けた人物です。今回は、日常に溶け込んだ邦坊作品の特徴、制作エピソードなどデザインの秘密について紹介します。
日時：11月1日(土) 10:00～11:30
会場：瀬戸内海歴史民俗資料館 研修室
講師：西谷美紀(炙まん美術館副館長・学芸員)
定員：40名(先着順)
②トークイベント 「香川のモノづくりとデザイン」
連続講座を担当する3名の講師が一堂に会し、それぞれの専門分野の視点から本企画展について語り合います。
日時：11月8日(土) 13:30～15:00
会場：高松市屋島山上交流拠点施設 やしまーる
講師：中條亜希子(やしまーる館長)、西谷美紀(炙まん美術館副館長・学芸員)・田井静明(当館専門職員)、聞き手:松岡明子(当館館長)
定員：40名(先着順)
2. 重要文化財指定記念事業 「五色台体感ウォーキング」
れきみんがある五色台とはどんな場所なのか。美しい瀬戸内海の景観と自然を楽しみながら、大崎ノ鼻や近隣展望地、館内など、約6kmを解説付きで歩きます。
日時：11月23日(日・祝)
＜大崎山歩きコース＞ 9:00～12:30
＜スカイラインコース＞ 13:30～15:30
会場：瀬戸内海歴史民俗資料館周辺
定員：午前・午後 各20名(先着順)
(※詳細は瀬戸内海歴史民俗資料館ウェブサイトにてお知らせします)

■申込方法
電話、「香川県電子申請・届出システム」(※)から。
申込の際に、氏名、電話番号、イベント名をお伝えください。
申込先:瀬戸内海歴史民俗資料館 TEL.087-881-4707



カフェボット ミュゼ
くつろぎのひとときに、カフェボット ミュゼをご利用ください。伝統工芸展期間中はあん餅雑煮もご用意しています。
営業時間:9:00～17:00(オーダーストップ16:30)



ミュージアムショップ
1階ミュージアムショップでは、当館オリジナルグッズも販売しています。
営業時間:9:00～17:00

NEWS

THE KAGAWA MUSEUM

香川県立ミュージアム ニュース
2025 秋号
vol.66



CONTENTS

特集

学芸員おすすめ! 1階フリーゾーンの楽しみ方5選

展示室だより 特別展 第72回日本伝統工芸展

常設展 芝居がスキ!

アート・コレクション カラフル

日本伝統工芸展連携企画 冷静と情熱の工芸

書の世界 ―宸翰を中心に ほか

ミュージアムガイダンス vol.52 博物館の防虫対策

れきみんだより 回転馬鍬の調査からわかること

和泉 香織 硝子重箱「織花」

第72回日本伝統工芸展 日本工芸会総裁賞

作者は香川県出身。本作は三段の小さな重箱で、ねじり重ねた色ガラスを透明なガラスに吹き入れる。白や紫、赤色のらせんが連なる色ガラスは、咲き誇る藤の花を表現している。特別展「第72回日本伝統工芸展」で展示予定。

特集

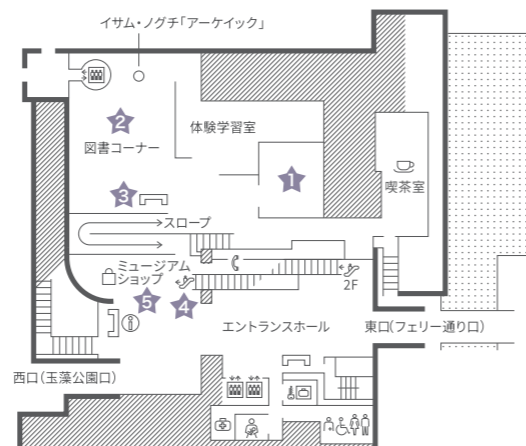
学芸員おすすめ！

1階フリーゾーンの楽しみ方5選

香川県立ミュージアムには、展示室以外にも学びや体験ができる空間があります。例えば、地下1階には講堂や工作室、実習室、1階には図書コーナーや体験学習室、喫茶室、ミュージアムショップなど、さまざまな施設があります。

なかでも、1階の「フリーゾーン」は、皆さまをお迎えする大切な空間。博物館というと「難しそう」「堅苦しそう」とわれがちですが、このフリーゾーンでは、遊ぶ・読む・調べる・触れる・見るなど、幅広い体験ができ、どなたでも気軽に楽しんでいただけます。

ここでは、学芸員がおすすめする、フリーゾーンで体験できる5つの「楽しむ！」を紹介します。



1 座って楽しむ！香川県のデザイン家具

戦後、数々の優れたモダニズム建築が登場した香川県。なかでも屈指の名作、丹下健三設計の香川県庁舎旧本館及び東館（重要文化財）の家具を紹介するコーナーがあります。

庁舎は昭和33年（1958）に竣工し、あわせて家具も製作されました。家具の設計は、剣持デザイン研究所や丹下健三研究室が担当しています。剣持勇はジャパニーズ・モダンを先駆け、戦後日本の工業デザインの礎を築きました。

このコーナーでは、木とスチールの組み合わせが端正な、剣持デザインの「知事室机・脇机」と、両面棚で室内空間を仕切るという建築的発想から生まれた丹下研究室による「執務室仕切り棚」を展示しています。

また、図書コーナーやエントランスホールには実際に座ることができる、いろいろなイスが並んでいます。いずれも、かつて県の各施設で使われていました。五色台少年自然センターや香川県文化会館のイスはすぐれた合板の加工技術によって、シンプルで美しく作り上げられた逸品です。剣持デザインの旧香川県立体育館の木製のイスとテーブルは、重厚な積層の木材が独特な表情を見せています。ぜひ香川県ゆかりのデザイン家具の座り心地を、試してみてください。



写真①



写真②



写真③

①香川県庁舎東館の家具の展示コーナー ②五色台少年自然センターの椅子と旧香川県立体育館の机 ③図書コーナーとアーケイック

2 見て楽しむ！本だけじゃない図書コーナー

図書コーナーには、歴史・美術・民俗などに関する4,000冊余りの図書を配架しています。香川県に関する本や美術作品の詳細が分かる大型本に加え、歴史や美術を分かりやすく学べる子ども向けの本もあります。

この図書コーナーには、本以外にも楽しめるものがあります。それは、世界的に活躍した芸術家のイサム・ノグチによる石の彫刻「アーケイック」です。ノグチが高松市牟礼町にかまえていたアトリエで制作したもので、石の表面は手で磨き重ねられ、直立するラインにもどこかあたたかみを感じられます。もとは県庁舎本館2階に設置されていましたが、平成20年（2008）に当館へ移設されました。「アーケイック」は露出展示されており、展示ケース内で見える資料・作品と違い、360度どの方向からも、近くから石の表面の質感を見て楽しむことができます。

今年度、図書コーナーでは広々とした空間を活用して、ナイトコンサートや講座「おしえて！ミュージアムゼミ！」といったイベントを行いました。夜間開館時には、ノグチが手がけた光の彫刻「AKARI」を点灯し、多くの方に楽しんでいただきました。

3 家族で楽しむ！「ほんのもり号文庫」



写真④

瀬戸内の島々の子どもたちに本との出会いを届けるため、今年の4月から「こども図書館船 ほんのもり号」が運航を開始しました。子どもたちに瀬戸内の海や島、本に興味をもってもらうため、「ほんのもり号」の所有する図書から、香川大学の学生が選んだおよそ100冊が図書コーナー内に配架され、「ほんのもり号文庫」として開設されました。

4 触れて楽しむ！「衆鱗図」の「鯛」と「鯡」！



写真⑤

「高松松平家博物図譜」（香川県指定有形文化財）の魅力を広く伝えるため、特に水生生物を緻密に描いたことで有名な「衆鱗図」の陶板2枚（鯛と鯡）をエスカレーター脇に設置しています。

この陶板は大塚国際美術館（徳島県鳴門市）の世界名画の複製品と同じ技術、陶の焼きと彩色の工程を繰り返すことで、平面的なものを忠実に再現する特別な技術によって製作（大塚オーミ陶業株式会社）され、公益財団法人松平公益会から贈呈されました。銀箔を使った光沢のある色合いの特徴がよく再現され、盛り上がった顔料の立体感、描かれた魚の輪郭、尖った鰭などを触れて楽しむことができます。

5 買って楽しむ！ミュージアムのオリジナルグッズ

「ミュージアムグッズを見れば、ミュージアムがわかる」とまで言われる博物館のオリジナルグッズ。当館でもコレクションにちなんで、学芸員が開発した複数のオリジナルグッズがあります。例えば当館コレクションの筆頭である国宝「藤原佐理筆詩懷紙」から、花・思・桜・光・流の文字を選んで缶バッジを作りました。ガチャ機での販売のため、チャレンジして全種類揃えてみてください。

「高松松平家博物図譜」をデザインしたクリアファイルは、「衆鱗図」など、全種4種類あり、テーマカラーもそれぞれ異なります。また、金魚・鯡・蟹をデザインしたグリーティングカードは、インパクトのあるデザインです。

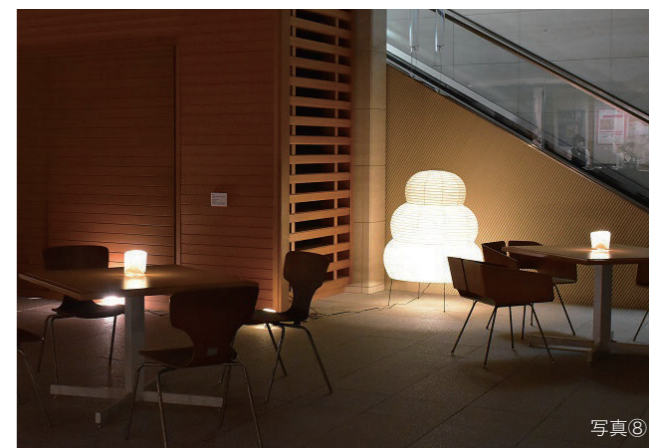


写真⑥

写真⑦

おわりに

展示室とは異なり、自由度の高い1階フリーゾーン。展示資料を見るだけでなく、実際に触れたり体験したりできます。これまでとは少し趣向を変えた講座やコンサート、飲食の提供など、この広い空間を生かして新しい事に挑戦していく予定です。ミュージアムの挑戦と進化を、ぜひお楽しみに！



写真⑧

④ほんのもり号文庫 ⑤「衆鱗図」の陶板 ⑥国宝「藤原佐理筆詩懷紙」缶バッジ ⑦「衆鱗図」グッズ ⑧エントランスホールで開催したMuseum Night Barの様子

特別展 第72回日本伝統工芸展 令和8年1月2日(金)～1月18日(日)

新春恒例となっているこの展覧会では、陶芸、染織、漆芸、金工、木竹工、人形、諸工芸の7部門において、伝統技術を受け継いだ作家たちが、その技術をさらに磨き、現代の生活に合った新しいものとして制作した作品をご鑑賞いただけます。

今回の高松展では、重要無形文化財保持者(人間国宝)41名(内2名は香川県在住)の新作を含む、合計220点の作品を展示します。日本工芸会総裁賞を受賞した和泉香織さんをはじめとする入賞者、四国の在住者、香川ゆかりの作家の作品、さらに、ワークショップ「うるしにチャレンジ」で子どもたちが制作した漆芸作品も、展示予定です。

四国での開催地はここ香川のみ。日本の伝統技術を活かして生み出された、最新の作品をぜひご鑑賞ください。

(技師 青野 光留)



第71回日本伝統工芸展会場風景

開催情報

開館時間：9:00～17:00

会場：特別展示室、常設4・5室ほか

観覧料：一般700円、前売・団体(20名以上)560円

(高校生以下、県内在住の65歳以上、障害者手帳・特定医療費(指定難病)受給者証・小児慢性特定疾病医療費受給者証等の提示者とその介護者は無料)

関連行事：・講演会

「日本工芸会総裁賞受賞記念 ガラス工芸の美と技(仮)」
1月17日(土) 13:30～15:00

講師|和泉香織(ガラス工芸家、日本工芸会総裁賞受賞者)

・プレミアムナイトツアー

1月10日(土)、1月17日(土)各日18:00～20:00

(詳細は当館ウェブサイトにてお知らせします)

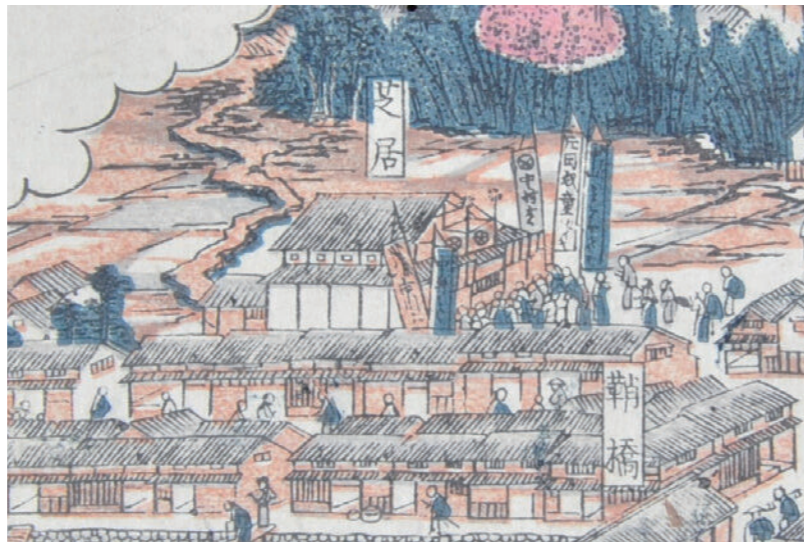
常設展示室1

芝居がスキ!

10月30日(木)～12月20日(土)

アニメを取り入れたり、映画になったりと、何かと話題になる歌舞伎。「見てみたいな」と思いながらも、なかなか機会がないという方も多いのではないのでしょうか。香川県は、現存する日本最古の芝居小屋である旧金毘羅大芝居「金丸座」(重要文化財)で、歌舞伎を鑑賞できることで有名です。近代的な劇場とは一味違った雰囲気が魅力で、多くの人が観劇に訪れます。しかし、かつては県内各地にも芝居小屋があり、プロの役者による興行や地域の人々たちによる上演が盛んに行なわれ、後者は現在も農村歌舞伎として続いている地域があります。芝居好きが高じて歌舞伎役者となって活躍した琴平出身の中村福円(1865～1921)という人物もいました。芝居が身近だった明治～昭和時代を中心に、収蔵資料などから、県内の芝居の歴史を紹介します。

(専門学芸員 黛 友明)



「象頭山金毘羅全図」(部分) 江戸時代後期

ミュージアム・トーク:11/2(日)、12/14(日)

常設展示室1

日本伝統工芸展連携企画

冷静と情熱の工芸

令和8年1月2日(金)～1月18日(日)



窪田恒「雨だれの記憶」 昭和56年(1981) 撮影:高橋章

素材や造形の魅力がふんだんに備わる工芸。用の美を求めたり、あるいは用を超えた造形を求めたりと工芸の創造は拡大しています。本展では、漆工や金工などの工芸から、さまざまな角度で美が探究された作品を展示します。作者の技と思いが交錯する造形の魅力をお楽しみください。

(主任専門学芸員 窪美 西嘉子)

ミュージアム・トーク:1/10(土)*

常設展示室2

アート・コレクション

カラフル

11月5日(水)～ 令和8年1月18日(日)



重田良一「黄と青のひろがり」 昭和46年(1971)

赤、黄、青…、私たちの周りには、さまざまな色があふれています。それぞれの色から、私たちは異なる意味やイメージを紡ぐことでしょう。本展では、香川ゆかりの作家による、色彩に満ちた作品を紹介します。

(主任学芸員 日置 瑤子)

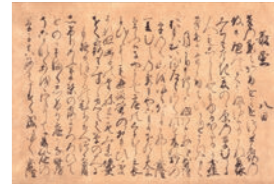
ミュージアム・トーク:11/24(月・休)、12/20(土)、1/11(日)*

常設展示室1

書の世界

—宸翰を中心に—

令和8年2月21日(土)～



重要美術品
「後柏原天皇宸翰 著御懷紙」
室町時代

天皇が自ら記した書を宸翰といい、南北朝時代には「宸翰様」と呼ばれる書風が確立しました。南北朝～江戸時代の宸翰を中心に高松松平家に伝来した書の名品を紹介いたします。格調高く個性的な書の世界をお楽しみください。

(学芸員 藤井 俊輔)

ミュージアム・トーク:2/21(土)、3/29(日)

常設展示室2

アート・コレクション

モノクローム

令和8年2月21日(土)～



泥谷文景「雲烟」 昭和時代

単一の色、特に黒と白を基調としたモノクロームの世界は、色彩を排したことでかえって奥行きを増し、見る人の心に静かに響きます。限られた色による表現の工夫や、モノクロならではの作品を紹介し、色を超えた表現の可能性を探ります。

(専門職員 岡本 由貴子)

ミュージアム・トーク:3/7(土)、3/22(日)

常設展示室4・5

アート・コレクション

現代書・

美の競演

令和8年2月21日(土)～



小森秀雲「沙羅」
平成元年(1989)

ユネスコ無形文化遺産の提案候補に選ばれた「書道」。筆、墨、紙、硯などを用いて漢字やかななどの文字を表し、古の名筆にならう伝統の書から、大胆に気持ちを表現する前衛の書までさまざまです。当館が収蔵する現代の書家が表現した書をご覧ください。

(主任学芸員 日置 瑤子)

ミュージアム・トーク:2/23(月・祝)、3/1(日)

※ミュージアムトークは各回14:00～(30分程度)。ただし*のついている日は14:30～

博物館の防虫対策

博物館資料の劣化や損傷の要因となるものには、**温度や湿度の変化、照明器具からの光、地震や火災など、様々なものがありますが、今回は、その内の一つ、虫についてご紹介します。**

博物館資料を加害する虫といっても、食害、汚染、^{えいそう}営巣など、その被害は様々です。捕獲された虫が、どのような被害をもたらすのか、どのような生態なのかを知った上で、適切な対策を講じるため、昆虫博士には及びませんが、資料に害を及ぼす虫の概要を把握している必要があります。

博物館も人が存在する空間である以上、虫一匹いない状態にすることは、現実的ではありません。まずは、最重要エリア（収蔵庫、展示ケース内など）、重要エリア（展示室、写真撮影室など）、注意エリア（講堂、ロビーなど）などと区画を分け、区画にあわせた管理レベルを設定します。そして、館内各所にトラップを設置して、虫がいなかったを確認し（写真1-1,1-2）、それぞれのレベルに応じた必要な対策を考えます。

博物館で捕獲される虫には、おなじみの(?)ゴキブリ、ハエ、クモのほか、シミ、シバンムシ、チャタテムシなどがいます。シミは書籍の表面をなめるようにかじりとり、シバンムシは穴をあけて食害するなど、直接的な被害をもたらす虫は、一匹捕獲されたら、その周辺も含めた詳細調査をし、対策を講じます。ハエは、食害することはほとんどないため、一匹捕獲されたからといって必要以上に神経質になる必要はありませんが、排泄物による汚損が懸念されますので、侵入口や餌になるものがないかを確認し、環境改善をはかります。

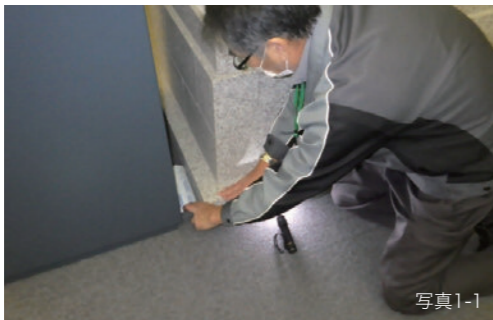


写真1-1



写真1-2



写真2-1



写真2-2

捕獲される虫の数は、建物内でも季節によっても変わります。春から夏にかけて増加し、秋から冬にかけて減少します。また、建物出入口付近では夏場にダンゴムシが大発生したこともあり、出入口扉の隙間を塞ぎました。水まわりでチョウバエが発生した時には排水口を念入りに清掃し、必要に応じて殺虫剤散布も行います。近年、新たに日本でも発見されているニュウハクシミが当館でも捕獲され、その際には専門業者に、徹底清掃を委託しました(写真2-1,2-2)。

以前は、燻蒸といって、密閉した空間にガスを投入して害虫を駆除していました。ガスは、資料に与える影響が少ないものを使用していましたが、人体や環境への影響があり、また資料へも全く影響がないわけではないため、現在は、IPM(Integrated Pest Management)・総合的有害生物管理の考えのもと、清掃や温湿度管理を基本として、収蔵資料を虫の被害から守るよう心掛けています。実は、これが基本で一番大切と分かっているながらも、時間も人手も必要で、大変な作業です。しかし、現在まで伝わり、後世にも伝えるべき大切な資料を虫害からまもるため、日々の目配りを心がけています。

(主任専門学芸員 高木 敬子)

写真1-1: 虫調査用トラップ設置の様子(展示室)

写真1-2: 虫調査用トラップ設置の様子(収蔵庫)

写真2-1: 館内で捕獲されたニュウハクシミ

写真2-2: 歴史展示室内、教室の廊下で、木板の隙間まで徹底清掃する様子

回転馬鍬の調査からわかること

回転馬鍬とは？

田畑を耕す際、現在では耕運機やトラクターなどの農業機械を使いますが、これらが登場する以前に、^{うしんが}牛鍬や^{うまんが}馬鍬などとともに牛馬に引かせて使用されていた農具が回転馬鍬です。県内では「コロウマンガ」「オニウマンガ」とも呼ばれ、前後に2列ある金属製の刃のうち、前側の回転する刃（鬼車）で土を刺し割って砕き、後側の直立する刃で田畑を平らにしました。

江戸時代後期の農書である『農具便利論』には、播州（現在の兵庫県南西部）で粘性が強い土を砕くため使うと記されています。先行研究では、明治～大正時代にかけて全国に普及したこと、地方色が豊かで地域ごとに形態や構造が異なることなどが指摘されています。

香川県で作られた初期の回転馬鍬については明治44年（1911）の全国農具展覧会へ香川郡鷺田村（現在の高松市鶴尾地区）の個人が出品したとの記録があります。また県内における過去の調査により、土を砕く鬼車の刃1つとっても太く短いもの、細く長いもの、直線的に延びるもの、先端がゆるく曲がるものなど多様な回転馬鍬が使用されていたことが明らかにされています。

書かれた文字から見た生産者・使用者

当館は県内一円で使用されていた回転馬鍬を約40点収蔵しており、その約半数に文字が記されています。内容を大別すると、製作者が記したもの（製作者名・住所、製作年、宣伝文句など）と使用者が書いたもの（使用者名・住所、購入年など）があります。これらの文字を見ると、製作者・使用者の住所は県内各地に偏りなく広がっている一方で、1つの回転馬鍬に記された製作者の住所と使用者の住所は同じないし隣接する市町村（当時）のものばかりです。今後、県内の回転馬鍬をさらに調査する必要がありますが、県内生産品が近接地域で使用されていた、つまり地元の農機具製作者による製品が近隣の農家により使われた例が多かった可能性が見えてきました。

千歯扱ぎとの対比と今後の展望

昨年度の千歯扱ぎを多数集めた展示では、県内の資料館などが所蔵する約220点を調査し、鳥取県倉吉・大阪府堺・福井県早瀬など江戸時代から続く県外の有名産地の製品が多数もたらされている一方、県内の生産品はわずかであることを確認しました。こうしたありようと比べると、回転馬鍬の生産体制は地域密着型であったようです。千歯扱ぎの対象は稲・麦などの穀物^{さ れ 穂}穂であるのに対して、回転馬鍬の対象は土であり、粘性や砂礫



の含み具合など地域ごとの違いが大きいため、その特徴をよく知る地元の農機具製作者の方が農家の注文に対応しやすかったのではないかと考えています。

調査はこれから佳境を迎えますが、従来の研究で指摘されている香川の回転馬鍬の多様性や盛行について、大きさや形態とともに、様々な文字記録に注目しながら追究し、その実態を明らかにしたいと思います。

(瀬戸内海歴史民俗資料館 主任文化財専門員 長井 博志)



[左側板]



[右側板]

回転馬鍬(当館蔵)

左側板に「昭和三十四年 大極上請合別製」墨書

右側板に「昭和三十四年 高松市東山崎町川北農具製作所」墨書

高松市前田西町で昭和37年ごろまで使用されたとの聞き取りあり

瀬戸内ギャラリー第19回企画展
**「たくさん集める」から
わかることⅡ**
—生活用具に記された文字記録—

令和8年1月10日(土)～2月23日(月・祝)

当館をはじめ、県内の資料館等が所蔵する年号などの文字記録が記された生活用具を一堂に集め、モノと文字が織りなす暮らしのモノ語りを探ります。